



山山アートセンターをつくる

2020

YAMA YAMA ART CENTER
IN PROGRESS


「山山アートセンターをつくる 2020」は、
2015年に始まった「山山アートセンター」の
これまでを振り返り、
これからを考えるための1冊です。





見渡す限りの山山、
そして世界中どこでも

山さえあればそこが山山アートセンターだ、と信じる。
そうすることで、自分が自分として生きていける、と信じる。



YAMA YAMA ART CENTER

「らくがき」だらけの古民家

山山アートセンターとは、京都府福知山市の山間部・三岳エリアにある一軒の古民家……のことではない。私たちがふと遠くを見つめた時に見える山山、そんなどこでもないどこか、見渡す限りすべてが山山アートセンターだ。三岳の古民家はなんなのかといえば、見渡す限りの山山でつながるアートセンターの「点」の一つだ。

三岳の国道を山あいにくねくねと車で登っていくと、古民家にたどり着く。車を置いて急な坂を登って玄関。玄関から和室を抜けると、広い板の間が広がっていて、奥には薪ストーブがある。壁面や天井に目を凝らすと、絵やひょうたんなど、これまでここに滞在した人々の痕跡が飾られている。

この古民家は、6年間にわたって山山アートセンターの代表・イシワタマリー一家の生活の場でもあった。だからこの場所では、アートに触れることは食事や睡眠と同じようなもので、生活や人生との境界線が曖昧なものだった。

襖は、取り外しているんなところに持ち出され、イシワタによってキャンパスの代わりに使用された。大きな絵が描かれ一枚の作品となった襖は、そのあと再び古民家の襖としての役割を取り戻した。自由に着彩された襖は、イシワタ家の生活のなかで、子どものキャンパスでもあり続け、作品の余白に、あるいは作品の上から、新たな絵が重なっていった。

春には萌黄色の山の緑が夏に向けてだんだんと濃くなる。秋には赤く色づき、冬には雪に覆い隠され白色で埋め尽くされる。季節とともに移り変わる山の色彩に、古民家を彩る「らくがき」の色彩が重なる。そして「とにかく生きよう」とする山山アートセンターに、人と人々を結びつける。



2020年の山山アートセンター
イシワタマリ インタビュー



意味深な余白

「もがくイシワタマリさん」からの脱却

イシワタ：これまで「山山アートセンター＝私」がもがいてる姿そのもの」っていう印象が強かったと思うんです。いろいろなアーティストがここに滞在しましたが、私と家族がここに住んでいたから「滞在＝イシワタ家の生活に巻き込まれる」ってことだったと思うし。

—そこから変化したかった？

イシワタ：そう、「見渡す限りの山山がアートセンター」という壮大なネーミングの実態が「もがくイシワタマリに巻き込まれる」だけでは寂しいというか。

—山の「壮大さ」を感じられたのってどういう時ですか？

イシワタ：ここに引っ越した時です。私の原体験は横浜のまちで過ごした子ども時代。ぎゅうぎゅうの満員電車で通学していたので、その感覚からすると別世界でした。

—夢の移住みたいなの？

イシワタ：そういうわけでもなくて。もともと「アート」とか「表現」という活動を軸に土地を転々とするなかで結婚して、ここに引っ

越したのはちょうど初めて子どもができた時でもありました。「個人としての私」の居場所がなくなって、急に「家族の中の私」「家庭の主婦としての私」だけになってしまった。それまでよりどこかにしていた「自分」とか「アート」が突然消えてしまったことへのとまどいのほうが大きかったです。

—その時点では「執着」があったわけですね。

イシワタ：はい。そこから救ってくれたのが地域の人たちでした。壮大な山に抱かれて暮らす人たちは、良い意味で人間のちっぽけさや何もできなさを受け止めているというか、爽やかな「こだわらなさ」を持っている。それでいて各々が各々のペースで過ごしている。山の景色には、自分をがんじがらめにしてきたものをスッと手放してしまえるようなスケール感があります。どうにもならないことを、山に託してしまえる。

—それで、山山アートセンター

イシワタ：それまでの私は「自分」にも「アート」にこだわりすぎていたんだなと。生きるよりどころを見失いそうになったその時に、「アートだろうがなかろう

が、とにかく生きよう」っていうキャッチコピーに繋がっていきました。

—なるほど。そんな「山の壮大さ」にふさわしい姿として、「山山アートセンター＝イシワタマリ個人、から脱却しよう」ということなんですね。脱却した姿ってどういうものなんでしょうか。

イシワタ：私以外のいろんな人が各々のペースで生きているようすが見える、という状態だとは思。ここ三岳は象徴的な拠点ですが、昨年私たち家族はよそへ引っ越したので、これもひとつのステップと捉えています。過疎地なので、当初は地域の方たちに「あなたたちも出ていってしまうのね……」っていうなんとも忘れがたい表情を向けられたのですが、今は「あれ、出ていったかと思ったらしょっちゅう来るやつだな」と拍子抜けされてると思います。「出ていく／留まる」の二択じゃない、もっとおもしろい関係になりたいってことを伝えていけたらいいな……と。

あれも山といえば山

—この場所が生活の場所じゃなくなって、これからどんな風



理がついた。ある意味では飛躍の年だったといえるし、とはいえ具体的なアウトプットは今年はない。しいていえば「意味深な余白」のような1年。加えて、初夏に第3子の妊娠が発覚したので、個人的にもほんとうに全然動けない年でした。

— 余白みたいな過ごし方を余儀なくされますね。

イシワタ: 妊娠中は頭がボヤリして布団からろくに起き上がれず、嘔吐にあけくねしながら毎日をなんとかやり過ごすしかないので、何もしていないように見えて実はおなかの中で別の人間がぐんぐん成長しているってなんだか不思議ですよね。この1年の過ごしかたとしてはある意味ふさわしかったかもしれない。何も動いていないように見えても、水面下では何かが生まれて変化してる……山山アートセンターにとってもそんな年だったんじゃないかなと思ってます。

ます。立場が決められているとお互い窮屈だと途中で気づいて。「それぞれが力を持ち寄ることとてにかく生きようとする」っていうところが山山アートセンターらしいなと思っていますね。

意味深な余白

— 2020年ほどんな1年だったんでしょうか。

イシワタ: 「あんなことしたい、こんなこともしたい」って生き急いで詰め込んでしまうタイプなのですが、この1年は、結果の出しにくい余白の多い年だったといます。

— 余白ですか。

イシワタ: はい。誰もがコロナの影響を受けて、ふだんと違う時間の過ごしかたをしたり、考える時間が増えたりしたと思います。私は「とにかく生きよう」というテーマの核心にさらに迫ったというか。

— 初心にかえれたっていうことですか。

イシワタ: 初心にかえったというか、「この状況で“とにかく生きよう”ってどういうことだろう」っていう整

しかも野外で集まるようなくみを増やしたい。「畑サロン」もそのひとつです。

— 遠くの人たちとつながるっていうのは？

イシワタ: オンラインで実施してる「山山よもやま相談室」。関わってる人たちは遠くにいても、じつは山に縁がある人が多かったりもして。何度か喋るうちにある日「そういえば奈良の生駒山に引っ越すんだ」とか「友人がフィリピンで山をテーマに作品制作して」とか。インドのヒマラヤ山麓との交流が生まれたり。都会にいても何かの拍子にふと山っぽいものに遭遇して「あっこれも山？」と思ったりとかね。大都市間のネットワークではない「世界中の山の見えるところのネットワーク（心理的な?）」に興味があります。私が今いる場所はそもそもどこからも遠いから、この1年でオンラインでつながる習慣がついたのはありがたいですね。

— 山山よもやま相談室は、どういう相談室？

イシワタ: テーマは特定せず「相談する側/される側」の立場を取り払ってお互いに相談しあう場、としてい

利用されていくんですか？

イシワタ: もともとアーティスト・イン・レジデンス(=AIR ※アーティストを招き、滞在および作品制作場所を提供する取り組み)をやりたいと考えてました。この環境は「不便」ですが、創作活動においてはそれをプラスに捉えるアーティストも少なくないはず。

— このご時世なんで、遠方の人を招く事業を本格的には動かしづらい面もあるかとも思いますが、じっくりAIRに取り組んでいく？

イシワタ: AIRを含め、取り組みの方向性は大きく分けるとふたつあって、ひとつはこの地域に暮らす人たちと向き合うこと、もうひとつは遠くの人たちとつながること。

— 地域の人たちに向き合うっていうのは？

イシワタ: 「高齢者福祉」という文脈で今どんなことが話されているのかをリサーチしつつ、「高齢者」という集団では括りきれない、目の前のひとりひとりに出会わせていただく。この数年で地域のお年寄りに向けた「よりあいみたくサロン」をやってきましたが、少人数

1. わたしを介護するときに読んでほしい AtoZ
2. よりあいまたけサロン&畑
3. 山山 AIR & 三岳地域研究
4. 山山よもやま相談室

1. わたしを介護するときに読んでほしい AtoZ

個人の生活歴・個人史・価値観にまつわる A から Z のキーワードを抽出するインタビュー調査を実施。人それぞれが介護される立場になったときに携帯できるものをつくることを想定。今年度時点では、入所および通所施設利用のお年寄りや、医療関係の仕事をするひとへのインタビューを試みた。インタビューをしていくにつれ、介護における「当事者」とは、介護を受ける「1.わたし」だけでなくその「2.家族」も含まれることに気づいた。本事業を進めるにあたっては、1.わたし、2.家族、3.第三者という3つの立場の人が揃う必要がある（1,2の二者だけでもきっと進まない気がしている。ところで「家族」ってなんだろう？これ、実は簡単な話ではない。）



インタビューに協力してくださった素敵な親子。

2. よりあいまたけサロン&畑

京都府福知山市三岳地区にて、月1回、お年寄り対象のつどいの場づくりを試みてきて4年目。コロナ禍も相まって参加人数が激減するなか、実施・中止の判断もアナウンスも難しく、地域のお年寄りはそもそもどんなものを求めているのか／いないのか、これを機にもっと個別の声を聞かせていただくことにした。

畑サロン（野外でのつどい）も併せて実験しつつ、民生委員さんとお話させていただく機会も増えた。月日を重ねるごとにつくづく思うのは、こちらが何かしてあげるなどと思うのは馬鹿げていて、人生の先輩方はいつも私より1枚も2枚もうわてだということ。それを受け入れることからしか何も始まらないようにも思う。とはいえ、私は車を運転できる、ということも事実なので、山の下に住むおばあちゃんを山の上に住むおばあちゃんと久しぶりに出させてあげられた、というできごとは私にとっても嬉しかった。山の下のおばあちゃんも山の上のおばあちゃんも久しぶりすぎておしゃべりが止まらなくて、甘納豆と塩飴を交換していたのがかわいかった。もっと長いこと気軽にしゃべらせてあげられたら良かったのになと思う。そして、そのくらいのことしかできない。

3. 山山 AIR & 三岳地域研究

三岳地区内の空き家物件を活用したアーティスト・イン・レジデンス（以下、AIR）事業。AIRとは国内外から訪れたアーティストに一定期間の滞在・制作場所を提供する取り組みのこと。2015年から2019年にかけて、同物件はイシワタのプライベートな生活拠点でもあり、ゲストはイシワタの家族生活とないまぜになりながら滞在期間を過ごしてきたが、2019年にイシワタ家は生活拠点を引っ越し。改めて空き家物件として活用方法の模索が始まった。

とはいえコロナ禍の影響を受け、海外および国内の都市圏からのゲストの滞在予定はすべて延期。大きな進展はできなかったものの、タカハシ‘タカカーン’セイジ氏が来訪して地域の伝統芸能である「練り込み太鼓」についてのインタビューを行ったり、空き家物件の今後の空き家活用方法について蛇谷りえ・三宅航太郎両氏がリサーチを行ったりと、地域の中でAIRを展開していくための小さなヒントを少しずつ積み重ねていくことができた。



三岳地区にポツポツと点在するかかしたち（住民グループ「三岳かかしの笑学校」の作品）と記念撮影する蛇谷りえ氏。

ここは、「山山よもやま相談室」という名の場所です。

山山 よもやま相談室

相談のテーマや目的は特定せず、「相談する / される」という立場を取り払い、「相談する」こと自体にどのような作用があるのか、実践しながら思考します。

— 方針 —

1. 相談とは、
具体的に何かの解決を目指すことではなく、
心のモヤモヤを対話すること。
2. 相談員とは、
相談者自身であり、
個々の経験や知識、想像力をもって他者を歓迎する人のこと。
3. 相談者とは、
日頃の生活や仕事の中で、風穴を求めるすべての人のこと。
発言せずとも、相談者の話に耳を傾けることができる人。

第1回緊急事態宣言下にあった2020年5月に、Zoomを活用したオンライン相談室を試験オープン。

「シーズン1（2020年5－9月）」では週1回1コマ30分で募集した「悩み相談」に美術関係者たちが「相談員」として応じる形式とし、最終回は公開トーク形式でイシワタマリの「悩み相談」を囲んだ。

これをふまえて「シーズン2（2020年10月－2021年1月）」では、美術家・デザイナー・医療関係者・宿泊施設経営者・主婦といった多様なメンバーが集い「そもそも相談の場とはどのようなものであればよいか」を考察。週1回のミーティングや、既存の相談機関へのヒアリングなどを経て2021年以降の方針を定めた。

「シーズン3（2021年春～）」では「相談員＝相談者」として対話する仲間を広く募集。
www.yamayama-art.com

【相談員（参加順）】

イシワタマリ（山山アートセンター）、石神夏希（劇作家）、笠間弥路（美術家）、青木彬（インディペンデント・キュレーター）、タカハシ‘タカカーン’セイジ（すぞす/センター/家/AIR）、朝重龍太（地域アートマネージャー）、守本陽一（医師）、犬飼沙絵（主婦美術家）、森ちあき（診療所スタッフ）、古川絵美（作業療法士）

【ビジュアルデザイン】三宅航太郎（うかぶ LLC）

【ヒアリング・編集】蛇谷りえ（うかぶ LLC）



AIR ▶ AIR (アーティスト・イン・レジデンス)

国内外から招いたアーティストに一定期間、滞在制作場所を提供する取り組み。山山では、福知山市三岳地区の古民家物件をおもな拠点に2015年12月から現在まで、不定期ながら小さなAIR活動を続けている。

Bukatsu ▶ いろいろやってみる部

山山の前身として2015年元旦に発足した【気になる場所やひとと一緒に訪ねたり、気になる本・映画・音楽・テレビ番組を共有するなどのきっかけを通じて、お互いがやってみることにゆるやかに寄り添い合う、地域の部活動です。やってみるひとが2人以上いれば一緒にやってみます】という、何か言ってるようで何も言っていない部。それでもとにかく旗を掲げてみたことで人が集い始め、新陳代謝を繰り返しながら現在の山山につながっています。→「K」参照。

Chiiki ▶ 地域包括支援ケアシステム

誰もが人生の最後まで住み慣れた地域で自分らしい生活を続けられるよう、地域内で助け合う体制をつくらうとする国の方針。国の少子高齢化の実情を鑑み、2025年を目処にそれぞれに地域の実情にあった医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供されるシステム構築を推進する。行政のロジックでいえばそういうことになる。山山的に翻訳するとどうということになるか。その落としどころを探る日々である。

Dokkoise ▶ ドッコイセ

福知山市民の合言葉。明智光秀による福知山城修復工事に携わった人々の掛け声が起源とされる。→「F」参照。

Ehon-no-sekai ▶ 絵本の世界の絵画教室

2015年から2019年にかけて行われた絵画教室。ユニークな地域住民たちが集い、毎回さまざまなテーマのもとお互いの表現世界を味わった。綾部市中央公民館で2年間実施ののち、農家民宿イワンの里でのランチ付き教室へと変遷。

Fukuchiyama ▶ 福知山

山山の代表が暮らす地方都市。京都府なのに京都駅から特急で1時間半、それさえ近隣市町村からすれば「都会」であるという事実が東京圏出身者には受け入れづらく、愚痴を言っただけで地元出身者とのケンカの火種となった。古来より数々の災害や鬼伝説とともに暮らし、市のキャッチコピーを「いがいと！福知山」とする独特のセンスに年々愛着が増し、今やすっかりただの地元の主婦と化した代表。

Gakko ▶ 山山こどもアート学校

子どもたちが自分なりの歩き方を獲得していくことを願う学び場、先生がなるべくノウハウを教えず、子どもたちが自分の感覚を萎縮せずに試せる場として、2018年4月福知山公立大学学食でスタート。2019年より福知山市新町商店街シンマチサイトで月1回、日曜日に開催したが、講師たちの実の子どもたちの協力を得にくいままコロナ期に入り休眠状態。復活の手だてを練っている。

Hyoutan Oukoku ▶ ひょうたん王国みたけ (三岳)

山山発足以来おもな拠点となっている福知山市山間部の過疎集落、三岳地区。約30年前、住民たちがひょうたん栽培に精を出し、ひょうたん音頭を踊り、「ひょうたん王国みたけ」として名を馳せたという。そこに「アート」という言葉こそないが、住民との会話の糸口はひょうたんにある……という気がした。故、ひそかに「ひょうたんからこま計画」と名付けて畑スキルを学び続けているが、ひそかすぎてあまり功績を出していない。

Ishiwata Mari ▶ イシワタマリ

山山代表。横浜市出身、福知山市在住の美術家。「アート」が誰からも必要とされていない地域社会に移り住んだ自分自身の困りごとを糧に山山を立ち上げた。自称・逆境フェチ。

Jitsu-wa ▶ じつは福祉

山山の野望は「アートに軸足を置きつつよくよく考えるとじつは福祉、というさりげない場をつくること」。しかしそのためには「福祉」という領域に閉じ込められたさまざまな現実を真摯に学び、アタックしていかなければならない。→「X」参照。

Konoatari ▶このあたりのしんぶん

「いろいろやってみる部」メンバーを中心に、その時々に出会った人を巻き込みながら2015年10月から約3年間毎月発行し続けたフリーペーパー。ハサミとのりと油性ペンでできた原稿を輪転機でA3両面印刷して手折り、京阪神の都市部や山陰広域へ郵送したほか、福知山市三岳地区約230軒には全戸配布した。巻き込まれた人たちの負担が大きいことに気づき休刊となったが、幻のような謎のしんぶんの存在がさまざまな物語を産んだのも事実。現在も時たま発行されることがある。→「S」参照。

Live ▶とにかく生きよう

「さまざまな人が力を持ち寄ってとにかく生きようとする」ことが第一義。「アートだろうがなかろうがとにかく生きよう」というスローガンは“アート”の箇所を“優勝”“出世”“結婚”など、各々が執着しているありとあらゆるキーワードに置き換えて活用することができる。

Mochiyori ▶持ち寄りごはん会

山山でつどいの場をつくる際に度々行なってきたのが、ひとり一品持ち寄りごはん会。ちょっと作りすぎたお惣菜やそこらへんの店屋物もテーブルに並ぶと贅沢な気持ちになるし、初めまでのひとの暮らしや人となりが見られて楽しい。そしてコロナ到来によって完全NGなつどい方となる。→「Q」参照。

Nani ▶結婚ってなに？

少子高齢化対策として地域社会にのしかかってくる「婚活」「子育て支援」「移住促進」といったキーワードに踏み込んでいく企画として、2016年夏に行なったプロジェクト。「凡人ユニット」（内田聖良＋清水都花）を招聘し、依然として保守的な結婚観を持つ地域コミュニティの中で「結婚ってなに？座談会」や住民インタビュー撮影、それを元に振り付けしたばんおどりの制作を行なった。山山AIR事業・第2弾にして、「結婚／出産／子育てへのとまどい」という山山誕生の動機にせまった重要な企画。→「A」参照。

Obuuroshiki ▶大風呂敷

「見渡す限りの山山をアートセンターに見立てる」。そう、この、実態のない大風呂敷だけが山山アートセンターのよりどころ。

Performance ▶パフォーマンス

2015年12月、山山初のAIR事業として韓国・済州島からマヤ・シンジ・ジョンとヤンチャを招聘。マヤ氏のアコーディオン、ヤンチャ氏のダンス、山山代表のライブペインティングを併せたパフォーマンスを福知山市内数カ所で行なったのが、事実上の山山アートセンターの幕開け。ちなみに「パフォーマンス」とは演劇・音楽・ダンスほか身体を使ったあらゆる表現について用いられる言葉。代表は18歳のときに東京で始めたライブペインティング（人前で絵を描く行為）をきっかけにスペインに渡り、そこから世界各地の「パフォーマンス・アーティスト」たちと交流を広げていった経緯を持つ。→「A」参照。

Q-kei-shitsu ▶やまやま休憩室

山間部の「三岳会館」の1階和室をとりあえず毎週開けておく、という山山初期の取り組み。夕方からは一品持ち寄りごはん会とし、「どなたでもどうぞ」に対して遠方からもちらほら人が集い出したっばうで近隣住民からは敬遠されがちだったため、のちに地区在住高齢者対象「よりあいまたけサロン」へと変遷。

RED ▶赤

代表は赤髪。

San-in ▶山陰

京都府北部、兵庫県北部、鳥取県、島根県をあわせて「山陰」とよぶ（※場合によって範囲や定義は異なる）。山山にとっての「このあたり」は、現行の行政区分による「地域」以上にこの「山陰」の文化圏をイメージしていることが多い。

Tera ▶山の上のお寺でヨガ

三岳山中腹からの絶景を望む金光寺で行なっているヨガクラス。かつて山岳信仰のメッカとして栄えた同地で行うヨガは別格。四季折々の自然の美しさを味わえる。

Un-ei ▶運営に携わる人々

WEBサイトの更新や広報物の郵送、領収書の管理や畑の草刈り……こまごまとした作業をサポートしてくれる人々が、福知山市・綾部市・宮津市・京丹後市に散らばっている。「AIR」「いろいろやってみる部」「絵本の世界の絵画教室」「やまやま休憩室」などをきっかけに出会ったいろんな人々。→「A」「B」「E」「Q」およびp.12-13参照

Vasco ▶ バスク

代表が20代の頃にAIRで約2年間暮らしたスペイン北部地方。とにかく海外で経験を積みたい一心で出向いたものの、国の違い以上に、「田舎社会」での生きていき方がわからずに転落。この経験が山山の布石となっている。ちなみに地理的条件や気候がやや京都府北部に似ている。→「A」参照。

Watashi-o -Kaigo ▶ わたしを介護するときに読んでほしい AtoZ

2019年3月に福知山AtoZ研究所から発行された『イシワタマリを介護するときに読んでほしいAtoZ』を叩き台に、人それぞれが介護される立場になったときに携帯できる冊子をつくる取り組み。各々の生活歴・個人史・価値観にまつわるAからZのキーワードをまとめる。→p.014参照

X ▶ Fukushi x Art ▶ 福祉とアートの噛み合わないトークシリーズ

2018年宮津市の複合福祉施設マ・ルートとの出会いをきっかけに、「福祉の話とアートの話はなぜか噛み合わない」という出発点から、異なる立場のひと同士を掛け合わせるトークシリーズをスタート。「ダイバーシティ(多様性)」という言葉が取り沙汰されるが、多様なひとが共に生きるためには噛み合わなさを受け止め、ぶつかったり距離を工夫することも必要と考えるのが山山。なお、計画されていた「福祉とアートの噛み合わない合宿ツアー」はコロナ禍到来とともに幻として消えた。→「J」参照。

Yomoyama ▶ 山山よもやま相談室

2020年春、コロナとともに人々が抱えている悩みごとを共有する場を作ろうと始めたオンラインの取り組み。→p.16-17参照

Zero-ichi ▶ 0は1になった

個人的な困りごとを出発点とした山山にとって、この5年間は「0を1にする」と表現されるような道のりだった。何かが始まった、という物語も尊いけれど、ここから先はまた新しい道のりを展望していきたいと思う……。



2020年の春にまず思ったのは、「今はまだ語る言葉がない」ということだった。

変化に慣れてきた秋冬に人々の言葉に耳を傾けてみると、そうか、多くのひとが「不要不急」という言葉に抑圧されながら過ごした年だったのだ、と気づく。とくに文化芸術に携わってきたひとにとっては、そのひとの存在理由のすべてに「不要不急の烙印」が押されてしまったかのような、そんな1年だったかもしれない。

7年前が思いおこされる。アートが誰からも必要とされていない地域社会に「主婦」として移り住んだ、あの時。あの時の私はまさに、それまで自分の人生を突き動かしてきた原動力のすべてに「不要不急の烙印」を押された心地がした。それこそがまさに山山アートセンターの始まりだった。

「アートだろうがなかろうが、とにかく生きよう」

山山アートセンターは2015年、ひとりの主婦のごく個人的な悩みを糧に始まった。

そして2020年、そう、世界がこんなことになった今こそ、その真価が発揮される、はず。その意味では飛躍の年でもありつつ、今すぐに具体的なアウトプットを出せるわけでもない、「意味深な余白」のような1年。世界が転換していくさなかにある今、やっぱり、何かを語るための絶対的な言葉はまだ浮かんでこない。それでもここから先、さまざまな視点をもつさまざまな立場の人、人それぞれにとっての「とにかく生きようとするプロジェクト」として、山山アートセンターが展開していくことを願う。

イシワタマリ

山山アートセンターをつくる2020
YAMAYAMA ART CENTER IN PROGRESS

2021年3月 初版第1刷発行

企画・監修：
山山アートセンター

編集：
イシワタマリ、嶋田翔伍（烽火書房）

デザイン・写真撮影：
嶋田翔伍（烽火書房）

絵：
イシワタマリ（表紙、p.04-05, p.06）
ちとせ（p.02, p.08, p.20-24）

※本書の内容を無断で転載、複製することを禁じます。
©yamayama art center

発行：
山山アートセンター
www.yamayama-art.com | yamayama.art@gmail.com

助成：京都府（令和二年度地域交響プロジェクト支援事業）

